間にも多大の反響を呼んだのである。たゞ讀者としては、この大日本海の名がマゼラン的な太平洋の概念と支那人の所謂南海に於ける東西洋、特に小東洋の概念との間に如何に位置してゐるかに就いて博識の著者の教示を乞ひたい感じがする。しかしこの兩書を特色づけるものは著者の精到な考證と着實な調査とであつて、それが讀者にこの眞摯な作品への信頼感を與へてくれるであらう。なほ以上の三著とも出版の不自由な際、比較的鮮明な圖版が多數加へられ得たことも悦ばしい。(日本地理學史・刀江書院刊・定價七圓五拾錢、鎖國時代の世界地理學・日大堂刊・定價參圓八拾錢、大日本海・京成社出版部刊・定價參圓)(室賀信夫)

Stephen W. Reed
The Making of Modern New Guinea

ニューギニアが暗黑の大島といはれるのは、それが食人の風習をもつ未開民族の住地であつたからでもあり、一面この地域の調査が今まで餘り行はれてゐなかつた爲であるとするならば、この地域の研究それ自體が確かに大きい意義をもつといつてよい。社會學者としての著者がこの島の研究を志したのは彼の考へではこの島が「歐人と黑人の文化的接觸の實驗場」としての好個の地域であつたからである。尤も本書に取扱はれてゐる地域は舊獨領で後に國際聯盟によつて濠洲委任統治領となつた北東ニューギニアに限定されてゐる。

第一章土地と住民に於いて歐人渡來以前の本島の土着文化の形體を述べ、第二章に本島が歐人に發見されてより歐洲國家の一つの「附屬物」となつて行つた一聯の歴史的事件を記述し、第三章に一八八四年歐人支配權が確立されるまでの十ヶ年間に漸次貿易者農業經營者、布教者などの歐人の出現によつて始まる文化的接觸を取扱ひ、次いで歐人の政治的優位がいかにして獲得されそれが土民社會の生活に新しき狀態を强制して行つたかを考察しようとするが、この島に樹立された二つの歐洲統治横、卽ち獨領の時代と濠洲委任統治領の時代との二章に分けて土民統治の具體的考察がなされる。

この島の經濟的樣相は歐人との接觸により今では本來の土着經濟と歐洲的資本主義機構とが殆んど區別され得ない狀態となつてをり、これはこの島の主要産業たるコプラ生産、鑛山企業を歐人が經營することにより齎された現象であることは云ふ迄もないが、第六章はかゝる産業と貿易より專ら現在當領の經濟力を中心に考察がなされ、最後に現代ニューギニア——「新しき社會の創生」の一章を設け、歐人との接觸から本島に新しき社會が形造られつゝあるとなし、その文化的接觸に於ける個人の役割とか、新しき文化構造を創造する素因を論じ、社會學者としての著者の最も得意とする處であることは推測に難くない。かくて最後に「高低文化の接觸を解するものの多くは土着文化の逝去を悲む」が「ニューギニアの古い文化も亦急速に消失しつゝある。併し之は若い世代のものがその生誕より慣らされて來た狀態である」「本島の土民はより大なる安全感によりよき健康に、より安定せる食糧に、昔より

は惠れてゐる。だがその父祖よりも彼らが個人的に幸福であるか否かは我らの知るところではない。」と結ぶ。

彼らのいふ「新しき社會」に對するかゝる見解は將に土民社會の歐化を謳歌するものといふべく、而も在來の土民社會の破壞の上に、「新しき社會」を齎した彼らの植民史的事實に本質的に道義感の缺如を見出すならば、かゝる「新しき社會」は當然我らの再檢討を要すべきところであらう。

本書は一九三六年八月より翌年五月に到る著者自からのフイールドワークを基礎として著され、多くの資料を提供する點に於て當地域研究に重要なる寄與をなすものであることは疑ひのないところである。

本書は先に太平洋問題調査會 Institute of Pacific Relations により出版が企圖されてゐたが昭和十七年三月、上海軍報道部の手により上海にて印刷前の原稿を押收され、報道部に於て印刷せられたものである。（和田俊二）

黃土地帶

アンダーソン著
松崎壽和譯

支那史前研究に於て瑞典のJ・G・アンダーソン教授の名は本譯書の原書英譯本"Children of the Yellow Earth"と共に餘りにも著名である。本書は云ふまでもなく一九一四年北京農商部中國地質調査所の鑛政顧問として招聘されて渡支し、一九二五年まで滯在した十年間の「道筋の一里塚の石標には鑛山技師・化石蒐集家・考古學者といふ文字がつぎつぎに銘刻されてゐる」と書き初めてゐる教授の史前支那の自然的人文的踏査記錄であり、發見物語である。

本書は先づ地質・古生物學關係のものからはぢまるが自分に紹介可能な本書の後三分二の部分を簡單に述べて見よう。古生物學者としての教授が周口店洞穴に於いて「北京人類」の遺骨と遺物發見の端緒を開くに至る經過の物語の中には、その調査と研究に多くの學者が如何に心から提携しあつて世界的發見を可能にしたかを教へるものである。この發見端緒を導いた貢獻こそ教授の古生物學者としての一里塚の石標をはつきり銘刻したものでなくてはならない。「仰韶住居址の發見」の章では最初化石蒐集のための踏査に於てはからずも未知の彩陶を發見し、全く不可解な道に迷ひ込みむしろ專攻の地質・古生物學探究に閉ぢこもらうとした教授であつたが、北京に歸來してアナウの報告書によりかゝる土器の支那發見の理由を漸く首肯し得た事情が述べてある。仰韶彩陶文化に併行する沙鍋屯洞穴遺跡の調査となり、遂に彩陶文化の波及經路の問題と關聯して甘肅旅行をなすに至つた。かくて朱家窯遺跡の發見や「洮河流域」の諸遺跡踏査によつて、教授の爾後の餘生は專ら考古學的探究に捧げられることゝなつたのである。次に馬家窯村附近の住居址と併行する墳墓を邊家溝、半山、瓦罐嘴の山頂に發見し、豐富に採集された副葬壺の圖紋に於ける呪術的象徴性を考察してゐる。終章は「仰韶文明」としてオルドス沙漠の舊石器時代遺物と仰韶遺跡との間隙を連ねて遺跡未發見の事實を疑ひ、更に又仰韶期と殷との間隙は將來に推測を待つ可きものとし